

《博士論文要旨および審査報告》

高 朝順

第二言語習得における学習者要因と
学習継続意識の関連性について

——学位請求論文——

I 論文要旨

高 朝順

本研究は第二外国語としての日本語（JFL：Japanese as a Foreign Language）、第二外国語としての韓国語（KFL：Korean as a Foreign Language）を学習している学習者を対象に、学習者要因（達成動機・目標言語開始動機・言語不安・文化に対する態度・性格）と学習継続意識の関係を調査したものである。

学習者要因はプラス要因とマイナス要因、性格の要因に分けて学習継続意識との偏相関係数と重回帰分析を行った。また、試験経験の有無とレベル別に分けた分析には、偏相関係数とt検定を行い、平均値に差があるかを検討した。さらに、学習者グループ間の比較を行い、学習環境、社会文化的環境によって異なるところを検討した。最終的には、共分散構造分析を用い、学習者グループのモデルを提示した。

結果として、JFLの学習者グループ（D大学・H大学）とKFLの学習者グループ（M大学・S大学）の結果が異なり、学習者グループの特徴が見られた。また、試験経験の有無に分けて分析した場合、試験経験のある学習者グループが学習継続意識と有意差を示す要因が多く、試験という目的を持っていた学習者ほど、学習への持続意思があることが示された。

一方、レベル別に分けた場合、JFLの学習者グループであるD大学は、中級レベルの方が、学習継続意識と有意差を示す学習者要因が多かった。しかし、KFLの学習者グループであるM大学は初級レベルだけ、S大学には初級レベルに学習継続意識と有意差を示す学習者要因が多く見られ、その原因が社会文化的環境にあることがわかった。

このように異なる社会文化的環境にいる学習者の学習者要因が学習課程にどのように影響を与えているのかを探ることは、学習者への理解を深めることであり、学習者の指導、また教材開発などにも繋がるため、意味があると言えよう。

Ⅱ 審査報告

- (主査) 専修大学文学部 教授 備前 徹
(副査) 専修大学文学部 教授 王 伸子
(副査) 専修大学文学部 准教授 高橋 雄一

上記論文について審査の結果、博士論文として高いレベルを持つものと判定する。

以下、その審査報告である。

本論文は、韓国語を母語とする日本語学習者と、日本語を母語とする韓国語学習者を対象に、第二言語学習者の学習者要因と学習継続意識との関係を分析考察したものである。

これまでの第二言語習得研究では、学習成果に焦点を当て、学習者の動機、不安、適性、態度などの学習者要因を個々に学習成果との関連で考察する研究が多かった。しかし、学習成果を分析する以前にその前提として、学習者が継続的に学習を持続することが必要であるとして、本論文は、第二言語学習者の目標言語学習の継続に関わる要因に重点を置いて調査分析を行ったものである。

学習者要因は、学習者の社会文化的環境や、学習言語がその社会においてそのときどきでどのように評価されているかによって異なることが予想されるところとして、その点を考慮して、韓国の日本語学習者(D大学・H大学)と日本の韓国語学習者(M大学・S大学)を対象にアンケート調査を行い、統計的手法を駆使して分析を行った。

調査項目は、研究の目的である「学習継続意識」に関するものをはじめとして、「達成動機」に関するもの、「学習言語開始動機」に関するもの、「言語不安」に関するもの、「文化に対する態度」に関するもの、「学習者の性格」に関するもの、を取り上げている。

それらのデータをもとに因子分析を行い、まず以下の諸因子を導き出した。達成動機は「自己充實的達成動機」と「競争的達成動機」から構成され、学習言語開始動機は、「個別分野の動機」「実用的な動機」「一般的な動機」から構成されること、また、言語不安は「自尊心からの不安」「理解の不安」「クラスで行うことの不安」「学習言語話者と接する時の不安」から構成され、文化に対する態度は「学習言語文化に対する態度」「自国文化に対する態度」「異文化に対する態度」から構成されることなどである。

これらの諸因子を踏まえ、学習環境によって各因子がどのような関係にあるかを論じるとともに、学習継続意識と、達成動機・目標言語開始動機・文化に対する態度・言語不安・性格が総合的にどのように影響を与え合うかを考察し、最終的に共分散構造分析を用い、学習者グループの学習継続意識に関するモデルを提示した。

各章ごとの内容の概略は以下のとおりである。

第1章は、先行研究により、それぞれの学習者要因と学習成果の関係性、また、学習者要因の研究が主に英語を中心に行われたことについて述べ、単独の学習者要因では学習者を説明することは困難であること、また、学習成果だけではなく、学習者の学習過程を調べることの必要性を指摘した。

第2章では、アンケート調査項目の選定方法について説明した上で、調査結果を示した。

第3章は、アンケート調査から得られたデータを大学ごとに因子分析した。

第4章では、第3章で因子分析をした各グループのデータから、学習者要因をプラスの面（達成動機・目標言語開始動機・文化に対する態度の下位尺度）、マイナスの面（言語不安の下位尺度）、性格という3つに分け、学習継続意識との偏相関係数を算出し、重回帰分析を行った。

その結果、D大学データの分析からは、自己充実感と学習言語文化への肯定的な態度が継続意識を高めるが、競争心から達成感を得ようとするると継続意識は低下していくことが示された。H大学データの分析からは、実用的に使いたいと思

う動機が継続意識を高める。M大学データの分析からは、一般性をもつ動機、また、学習言語文化及び異文化に対して肯定的であるほど、学習継続意識が高くなるという関係性を見出した。S大学データの分析からは、競争しないこと、一般性を持つ動機と実用的な動機、学習言語文化に対する肯定的な態度が学習継続意識を高める要因になることを示した。言語不安に関しては、D大学のみで、不安を感じるほど継続意識が高くなる関係性が見られた。

第5章では、語学力認定試験の受験経験の有無、学習者のレベル、社会文化的環境及び専攻の可否による比較を行った。

試験経験の有無による結果として、D大学は試験経験の有グループほど学習継続意識と学習者要因の関係が多く見られ、継続意識も高いことを指摘した。H大学の試験経験の無グループは実用的な動機だけが学習継続意識との関連を見せたが、試験経験の有グループは自己充実感と情報の少ない分野の動機が継続意識との有意な関係を見せた。D大学とH大学の試験経験の有グループは学習継続意識と性格要因の情緒不安定性の関係が見られ、目的を持っている学習者ほどストレスと不安が影響していることを明らかにした。M大学は試験経験の有無に関係なく、異文化への肯定的な態度と授業の不安が継続意識に関係していることを示すとともに、試験経験の有グループの方は、自己充實的達成動機、知られている情報の動機が継続意識との関係が見られたことから、試験経験の有グループの学習者要因が継続意識と多く関わっていることが示された。

学習者のレベル別分析では、D大学では、中級レベルの方が初級レベルより自己充実感を得ること、及び学習言語文化への肯定的な態度が学習継続意識に関係しているという結果が見られた。言語不安については、初級レベルは不安が継続意識を低下させるのに対して、中級レベルの理解の不安は継続意識を高めるものにつながることを明らかにした。M大学では、初級レベルにおいて、異文化への態度、授業の不安が学習継続意識に関係している点が見られたが、中級レベルでは関係性が見られなかった。S大学の初級レベルでは、複数の学習者要因が学習継続意識との関係を示し、中級レベルでは学習言語文化に対する態度と授業の不安だけが継続意識に関係していることから、初級レベルには多様な目的を持っている学習者が多いが、中級レベルの学習者には共通する学習目的がありそうなのが示された。

社会文化的環境及び専攻の可否による比較からは、同じ環境で日本語を専攻し

ているD大学とH大学の比較を行い、H大学のほうがD大学より学習動機と文化に対する態度は高かったものの、学習者要因によって説明された学習継続意識はD大学の方が高いことを明らかにした。

同じ社会文化的環境で韓国語を専攻しているM大学と非専攻のS大学を比較した結果、学習言語を専攻しているM大学は動機、文化に対する態度が高く、非専攻のS大学は言語不安の方が高いという結果が見られた。異なる社会文化的環境の比較としてはD大学とM大学のデータを用いて分析を行い、D大学に比べM大学のほうが、学習動機と学習言語文化に対する態度、言語不安との関係が高かった。D大学では、自国文化に対する態度と性格要因との関係性が見られた。また、試験経験の有無と学習者レベルで分けて重回帰分析を行ったところ、D大学は試験経験の有グループと中級レベルで、M大学は初級レベルで、それぞれ学習継続意識とのつながりが見出され、大学によって異なる結果となった。その背景としては、社会文化的環境において学習言語文化が与えた影響と学習言語の価値が異なることが影響しているものと考察した。

第6章は本研究の総合考察として位置づけられ、学習継続意識と各種学習者要因との関連を示すモデルをパス図として提示した。4つのグループの結果は異なるものの、モデルを支える「達成感」「満足感」「充実感」「社会的評価の意識」「学習の不安感」という構成概念が共通に見られた。

以上が本論文の概略である。同じ社会文化的環境にいる学習者を対象とするにとどまらず、異なる社会文化的環境の中にいる学習者にまで範囲を広げその学習者要因を調べることで、学習者要因の多様な関係性を分析考察したものであるが、従来の、限定された範囲にのみ有効な学習理論ではなく、より多様な視点で学習者を見る必要があることも明らかになった。これによって、例えば第二言語を教える立場の人間がどういう方向から学習者への理解を深めればいいかが明らかにされただけでなく、それに応じた教材や教授法の開発にも貢献する研究であると言える。

研究テーマの設定は的確であり、分析に用いたデータ収集も適切に行われている。分析に用いた手法も理にかなったものであり、そこから導かれた結論も筋道立てて述べられており、妥当であると同時にこの研究分野に貢献するものである。

以上により、審査委員の一致した結論として、博士の学位を授与するに値する論文と判定する。

Ⅲ 学位授与要記

- | | | | |
|------------|--------------------------------|---------|-----------|
| 一、氏名・本籍 | 高 朝順（韓国） | | |
| 二、学位の種類 | 博士（文学） | | |
| 三、学位記番号 | 博文甲第五十一号 | | |
| 四、学位授与の条件 | 学位規則第四条第一項該当 | | |
| 五、学位授与の年月日 | 平成二十五年三月二十二日 | | |
| 六、学位論文題目 | 第二言語習得における学習者要因と学習継続意識の関連性について | | |
| 七、審査委員 | 主査 | 専修大学文学部 | 教授 備前 徹 |
| | 副査 | 専修大学文学部 | 教授 王 伸子 |
| | 副査 | 専修大学文学部 | 准教授 高橋 雄一 |